

古代の硯すずり

「文房四宝」という言葉があります。文房四宝とは、古代中国の文人が使用する文房具の中で、特に大切な道具であった筆・紙・硯・墨のことを指します。

硯は中国で発明された文房具の一つであり、約1400年前の飛鳥時代ごろに日本にもたらされたと考えられています。普段私たちが目にする硯といえは長方形をした黒い石のものが一般的ですが、古代の硯は今とは違った形をしていました。

写真は、湯浅御坊道路建設に伴う発掘調査で平成4年（1992年）に出土した平安時代の初め頃（約1200年前）の硯です。古代の一般的な硯は陶硯と呼ばれ、須恵器という窯で焼いた硬質の焼き物で作られていました。円形をしていることから「円面硯」と呼ばれています。

上面中央の部分は墨をする所で、その周囲はくぼんで堤が巡らされており、すった墨がたまるようになっていきます。その下部には台が付き、写真のものには方形の透かし穴がありますが、他地域では獣の足をかたどったもの

のなどさまざま
まなデザイン
のものが発見
されています。
遺跡の調査で
は、こうした
専用の硯以外
に土器を硯に
転用したもの
が発見される
ことがあります



円面硯（上部復元直径約10cm）

す。また、円面硯の大きさもさまざまであることから、専用の硯は限られた身分の人のみが使用するもので、使う役人の位などによって硯の種類や大きさが区別されていた可能性が指摘されています。

遺跡の発掘調査成果からは、硯が広く普及したのは奈良時代ごろと考えられます。古代の硯の存在は地方へも文字の使用が広がっていたことを示しています。

本号で紹介した古代の硯は、地域交流センター（ALEC）の資料展示室でご覧いただけます。

おわびと訂正

1月号（169号）本コーナーにおいて、画像説明文に「生体復元画」と記載しましたが、正しくは「生体復元画」です。また、3月号（171号）本コーナーにおいて「天智天皇の勅願（ちよくめい）」と表記しましたが、正しくは「天智天皇の勅願（ちよくがん）」です。
ここに訂正し、おわび申し上げます。